

め、子息は、それを悲しみ、遂に何所ともなく家出をせしま、今に踪蹟が知れないのでういます、それでももしや逢ふこともあらうかと思ひまして、諸國を廻つて居ります内、今日不圖この場に逢つた次第であります。

今迄語りましたことは、何んと珍らしい物語でムいませうと、恐々ながら妖怪の機嫌什麼と伺ひますと、妖怪は、餘程の話好と見へまして、

「僮の話は中々面白かつたから、約束通りこの人の罪の三分の一を宥してやる。」

と申します。この時老翁は、其罪を全体宥すやうにと頼みましたが、少しも聞入れず、

「これより少しも罪は宥せない、無益な口出すな、さあ僮の腕を先きに斬るから、腕を出せ。」

と云ひながら、太刀を振上げて文雄の腕を斬りか

けました。

この時花太郎は、今日はこれで休みますと云つて、王様に一禮して下りました。

いそぶの話

人殺し

人殺をした人が、追手から追いかけられて、ナイル河の岸まで逃げて来ると、そこに一匹の獅子が居たので、これは耐らぬと、木によぢ昇つた。すると、上の枝に大きな蛇が居たから、こりや叶はぬと云ふので、いきなり下の河へ跳び込んだ。所が、河には鱒が居て、たゞ一口にがぶりと飲んで仕舞つた。人殺をする様な人は、地の上でも、空中でも、水の中でも助かりつこなしたといふ話

獅子と鱒

一羽の鷲が、どこからか逃げて来て、獅子に攻守同盟を申し込んだ。すると、獅子のいふのが面白い。

「夫には我輩も反對はしないさ。然し、君が十分信用が出来るかどうかを知りたいものだね、我輩は、自分の勝手な時には、どんな約束もふりすて、飛んで仕舞ふ様な人を友達として信用することが出来ないからね」

信用する前には試みよといふことがある、鷲といへば、今日日本と戦争して居る國の外交も思ひ出されません。獅子の言ふことは賢いじやありませんか。

真理と旅人

一人の旅人が砂漠を旅行して居て、一人の女に遇ひました、

旅人「あなたの名前は何といふんですか

女「私は、真理といふものです。

旅人「あなたは何故、市街を出てたつた一人、こんな淋しい所に居るのですか

女「始め、虚偽といふもの、なかつた時は、私も市街に居りましたが、今では市街一杯虚偽が廣がつて來ましたから、私はこゝへ出て參りました。

獅子と狐

狐が、獅子の家來になるといふ約束で、獅子の仲間に入りました。そこで、各自の性質と力とに依つて適當した仕事を受け持つて働くことになつた。狐が、餌を見付けて報告すると、獅子が一跳びに跳びかゝつて捕へるといふ風に。所が、狐は、獅子がいつも餌をくわへては持つて行くのが、嫉ましくなつて來て、今度からは、餌を見付けるはいやだ、自分で見付けて自分で捕へるこ

とにしよと言ひ出した。そこで翌日、罅の中に這入つて行つて、小羊を一匹盗み出して來ようとしたが、忽ち、番人と犬とに見付かつて殺されたと言はさ。

貝の運動

さいえの貝でも、其他の貝でもよい。貝の蓋を取つて、大きな井に酢を入れて、其中に浮かすと、貝はぐる／＼獨り手に回轉つて運動します。これは貝の石灰質が酸に溶解けるからです。貝とは違ひますが、樟腦の塊を水に浮かして、火を付けると、くる／＼水中を回りながら美しい青い火が燃えます。

動物の保護色

大抵の動物は敵から、よーいに目つからないよーに外界の色と同じよーな色をしています。これは自然か動物を保護する爲に出來て居るのですから、保護色といひます。草むらにすんで居る虫類が、多くは草と同じ色をして居るのも、其類です。又所によつては、時によつて、動物が色をかへて行きます。たとへば、北の方の國では、夏頃、普通の色の兎が、冬になつて雪が降る時分になると、雪とよく似た真白い色に變ります。然し黒鳩公の頭の毛が、滿洲の此冬の戦から、真白くなつたのは、鳩の保護色ではありませぬ。